

育成センターだより

令和元年
No. 415

長野市少年育成センター
TEL. 228-8547
FAX. 224-0109

長野市青少年健全育成環境浄化強調月間(10月)
子ども・若者育成支援強調月間(11月)
児童虐待防止推進月間(11月)



10、11月の育成活動

年間最長の二学期を、子どもたちはそれぞれの目標を掲げ充実した学校生活を送っていることでしょう。実り多い収穫を迎えるこの時期に当たり、子どもたちの確かな成長を感じ取り、家庭、学校、地域が一層連携を強め、子どもたちとの関わりを深めながら、自立を支える環境の浄化、声掛け、非行防止に努めてまいります。

力を合わせ、 ゴミ拾い清掃活動



育成活動の重点



★「子どもの表情、言葉遣い、そのまま丸ごと受けとめよう」

二学期は目標が形になるとき。わずかな変化を見落とさず、成長を見つけ、励まし、見守りを。

★「あいさつは 子ども以上に 大人から」

笑顔でさわやかなあいさつを、子どもたちにプレゼント。できにくいあいさつだからこそ大人から。

★「深夜徘徊は 非行の芽」

不要不急の深夜の歩みに、遅い帰宅に、愛の一声を。街中の子どもの姿に愛の眼差しを。

★「相談は、受けとめ、寄り添い、語り合い」

相談は、まずはしっかり聴くことから。指導助言は二の次三の次。共に未来を語り合います。

「こども神輿」復活

長野上水内校長会
中学校生徒指導担当

犀陵中学校校長 山岸 浩

ワッショイ、ワッショイと10月になると、子どもたちが元気に神輿を担ぎ、小さな町を練り歩きます。笛や太鼓の担当も子どもたちです。沿道では、普段外に出るのが億劫になっているお年寄りの方々が、微笑ましく子どもを見守ってくれています。

小さな町の秋季大祭が近づいてきました。私の住む地域では、時代と共に大人が減り、子どもも減ってしまい、「こども神輿」の存続が難しくなり廃止した時代がありました。しかし、10年ほど前から地域の方々の願いで見事に復活しました。その背景として、子どもたちの「ワッショイ」という元気な掛け声を聞くことで地域に活力が生まれること、かつての子どもたち(自分)は地域の大人との触れ合いを通して、さまざまなことを学んできた・・・そんな地域に取り戻したかったこと、さらに地域で育つ未来の子どもに現在できることを、みんなが精一杯やりましょうという熱き想いが込められてのことでした。現在も小学生全員で10数名しかいませんが、地域の方々も参加し、毎年大盛況!です。



復活した「こども神輿」

都会だけでなく、時代と共に子どもの数が減り、共働きやひとり親家庭が増えています。このような変化の中、子どもの貧困や、児童虐待の深刻化が大きな社会問題となっており、「地域ぐるみで」、「社会全体で」子どもを育てようという意識が高まっています。ひと昔前まで、子どもの育つ環境には、両親以外に祖父母や親戚、あるいは近所の人など、何かと世話を焼いてくれる大人がたくさんいました。しかし、地域内のコミュニケーションが希薄になるにつれ、「世話好き」な大人の数も減ってきています。地域には、学校のカリキュラムだけではなかなか教えることのできない学びや体験があります。地域の大人との触れ合いを通して、私たちは学んできました。そんな健全な地域社会となるよう取り組むことを大事にしたいものです。

「子どもの自殺対策」

SOSの出し方に関する教育について

長野市保健所健康課 難病精神保健担当課長補佐 佐藤 恵子

思春期を迎えた子ども達が、一人で悩みを抱え込まず、信頼できる人にSOSを発信できるようにになるとともに、友達のSOSを受け止める方法を学ぶ「SOSの出し方に関する教育」が、始まっています。

この取組は、自殺対策基本法及び自殺総合対策大綱に基づくもので、子ども達の大切な命を守る自殺対策の一環です。

未成年者の自殺の実態

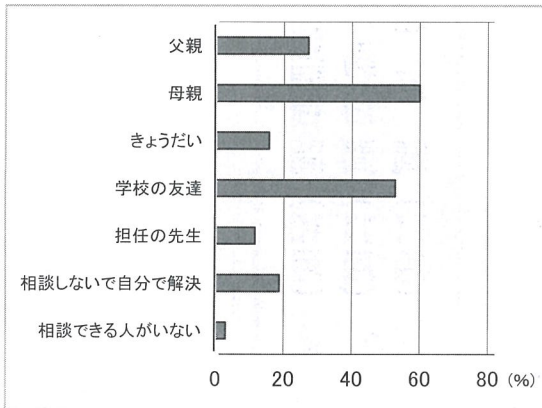
長野県の15～19歳の死亡原因の第1位は自殺です。

また、平成25～29年の5年における長野県の未成年者の自殺死亡率(人口10万人当たりの自殺死亡者数)は、3・97人で、全国平均2・44人を上回り、都道府県別では、全国で2番目に高い県となっています。

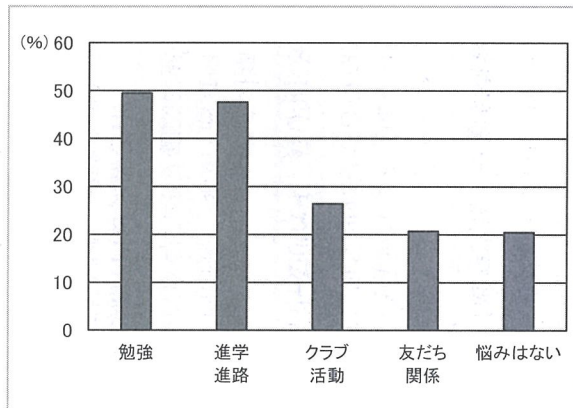
思春期の悩みの実態

長野県が平成29年度に実施した「長野県子どもと子育て家庭の生活実態調査」の結果(下記グラフ)から、中学生の約8割が、勉強、進学・進路、クラブ活動、友だちとの関係など様々な悩みを抱えていることがわかりました。そして、悩みごとや心配ごとの相談相手は、母親に次いで、学校の友達をあげています。

中学生の悩みの相談相手 (複数回答のうち主な回答)



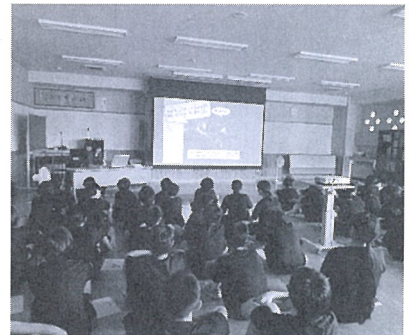
中学生の悩みごと (複数回答のうち上位5位)



SOSの出し方に関する教育の実際

《授業のねらい》

- 1 「自らを大切な存在」と認識することができる。
- 2 ストレスについて理解する。
- 3 ストレスに対処するための自分にあったセルフケアの方法を身につける。
- 4 悩みを一人で抱え込まず、第三者に助けを求めることができる。
- 5 友達の悩みを真剣に受け止め、信頼できる大人につなげることができる。



保健師を派遣した中学校での授業の様子

長野県では、このような子ども達の自殺の実態や生活実態調査を踏まえ、平成30年度に県内6校の中学校をモデル校として「SOSの出し方に関する教育」のモデル授業を実施し、全県で積極的に授業を実施していくことを示しました。
長野市においても、平成31年4月に策定した『長野市自殺対策行動計画』の中で「子どもの特性に応じた対策」の具体的取組として、「SOSの出し

方に関する教育」をあげ、4年後の計画の最終評価年度までに市内の全中学校で授業を実施することを目標としています。

この授業は、中学1年生を対象とし、講師は、保健師、養護教諭、担任、スクールカウンセラー等としていきます。そこで、市保健所では、今年度から市教育委員会と連携し、外部講師として保健師を希望する中学校には、市保健師を派遣し授業を実施しています。今年度、実施した中学校の生徒からは「みんなが自分と同じように悩みを持っていることがわかった。」「悩んだら、どんなことでも誰かに話してみようと思った。」「相談の仕方や話の聞き方がわかって良かった。」「友達が悩んでいたら悩みを聞いてあげようと思った。」「等の感想が寄せられています。

こうした取組により、子ども達が、現在の学校生活はもちろん、将来、社会において直面する可能性のある様々な困難やストレスへの対処能力を培ってほしいと願っています。

また今後は、子ども達への授業に平行し、周囲の大人が子ども達の発したSOSに気づく感度を高めるとともに、

子どものSOSをしっかり受け止め対応できる力を養い、子ども達にとって信頼できる大人になれるよう啓発や研修を実施していきたいと考えています。



みんなで力合わせて！

学校の取り組み紹介

「広徳修己」をめざして

学校少年育成委員 長野市立広徳中学校

北澤 貞明

広徳中学校は創立25年を迎え、市内では若い学校でしたが、はや四半世紀経ちました。令和元年度現在、1学年2004名、2学年177名、3学年189名の全校570名が生活する広徳中は、更北地区、川中島地区、篠ノ井地区の3地区に学区がまたがっています。

表題にある「広徳修己」とは広徳中学校の建学の精神であり、「徳を広め、己を修める」と解釈しています。この「広徳修己」につながる学校の取組を紹介します。

地域との交流で世界を広げる



学区内の地区で開催される「祭」に広徳中生は協力参加しています。特に「稲里町ふれあい祭り」では、生徒会役員が会場作りの手伝いや、美術部がポスター制作、吹奏楽部が演奏発表などしています。更北地区人権集会では、代表生徒が人権作文を発表するなど地域との交流が続いています。地域が中学生を迎え入れる場面をつくっていただいています。

学習場面で自分を振り返り

学級づくりで自身を伸ばす

学級づくりでは、所属集団への安心感を持

ち、自己の成長をはかるために、エンカウンターなどで人間関係やソーシヤルスキルの向上を図る時間として「広徳タイム」を設定しています。その時間は、生徒自身が楽しみながら考えたり自己を振り返ったりする場面であると同時に、教師が生徒の様子を感じとる機会にもなっています。

生徒会活動で自律と自立をめざす



以上、取組をいくつか紹介させていただきましたが、生徒や生徒集団の成長には、学級や生徒会で何をやったからではなく、その取組の場面で起きる生徒たちの変化を大人や仲間が感じ取り、認めたり、課題を投げかけたり、自己評価させたりすることが大切だと考えます。生徒指導の意義が、自己実現を図るための自己指導力の育成を目指している(生徒指導提要より)ことから、あらゆる場面で生徒への働きかけや環境づくりも、大人たちの仲間になる子どもをどの様な大人にして迎え入れたいのか、先を見通したものでありたいと考えます。

生徒会活動には「全校参加率・学級参加率」という言葉がよく使われます。「ペットボトルキャップ参加率は」といった具合です。学級ごとの量は問わず、全員が関わったかを大切に、100%の学級は表彰されています。生徒たち自身(卒業生がつくってきた伝統)が活躍の場面をつくっています。



学校少年育成委員

夏季巡回活動から

7月31日(水)、8月1日(木)

小中高育成委員の先生方に、地元のお店や公園、交番に加え、長野駅、中央通り、権堂周辺を回っていただきました。

巡回活動から、気になる出来事を中心に報告させていただきます。

コンビニ店で



タバコを買いに来る中高生がいる(駅前コンビニ)

下校途中に寄る生徒がいる(若槻・浅川方面)
一万円札で五千円の電子マネーを買いに来る子がいる(大豆島方面)

交番で

万引きの中学生を指導した(篠ノ井方面)
自転車の盗難が増える傾向(川中島方面)
お祭りや羽目を外しすぎる小中学生がいる(篠ノ井方面)
コンセントから充電する子に「窃盗にあたるよ」と指導(更北方面)

カラオケ店で



中高生の自転車30台ほどあった(権堂方面)
遅い時間の来店や灰皿を要求する青年には、年齢確認をする(権堂方面)

お店によっては高校生の退室時間を21時としている(駅前方面)
中には勉強している中高生もいる(権堂方面)

ゲームセンターで



女子はプリクラ、男子はゲームを利用している(駅前方面)

その他

イトインに居座る中学生や駐車場にたむろする子がいる(大豆島方面)
お菓子の箱を開けてしまう子に注意をした(更北方面)

この他、お店の方や警察の方が心配されている事があります。子どもだけで来ていたり、持ち物にタバコがあったり、音楽を聴きながら自転車に乗っていたり等です。夏休みの誘惑や決まりの拡大解釈に、羽を伸ばし過ぎないように願う夏巡回でした。

立入調査 (コンビニ店)が始まる

長野市青少年保護育成条例に基づき、有害図書類の区別された配慮ある陳列、青少年の飲酒・喫煙・万引き防止への協力を、育成センター職員が市内約200店舗を回りお願ひしています。

6月7日(金)セブンイレブン店様を皮切りに10月のDVDレンタル・販売店、書店様まで、延べ14日間、163店舗を廻りました。どの店舗も立入調査の趣旨を理解いただき調査を快くお受けいただきました。

どの店舗も明るく整然とし清潔感があり、成人向け雑誌、酒類の表示、陳列は明確でわかりやすいものになっていました。煙草販売の扱いも年齢認証が的確になされて配慮を感じます。

店内の客の動きもカメラやミラーで把握し、気になる子には声がけ、学校や警察など関係機関への連絡をしているとお聞きしました。最近では電子マネー振り込み詐欺を未然に防いだと表彰される店もあり、非行・犯罪防止に大変前向きな姿勢を感じました。



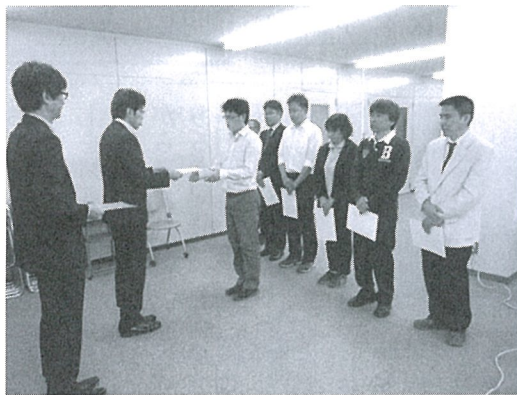
はっきりと、わかりやすく
(青少年健全育成に配慮ある陳列)

少年相談専門委員の 活動が始まる

5月9日(木)小中高から7名の先生方が専門委員に推薦され、地域・学びの課長より委嘱書が手渡されました。その後第1回目の委員会が開かれました。今年度は年4回の委員会が予定されています。学校の現場の指導事例に学び、成果や課題を各会で発表し、報告していただいています。今年も校種を越えた学び合いに期待しています。

少年相談専門委員

- 委員長 松村 勅幸(市立長野高)
- 副委員長 中條 悟(南部小)
- 委員 近藤 大造(浅川小)
- 委員 徳永 理恵(保科小)
- 委員 小林 克年(犀陵中)
- 委員 依田 哲也(篠ノ井西中)
- 委員 大井 徹也(中条中)



一年間よろしくお願ひします

巡回指導・環境浄化 活動関係者研修会開催

5月18日(土)、長野市内各地区の街頭指導・環境浄化活動に携わる方を中心に育成センターにて活動に関わる研修会を開きました。警察より青少年の非行・犯罪の現状の報告、育成センターより街頭指導・環境浄化活動の具体と配慮などを研修しました。



「犯罪・非行の現状がよく分かりました。気を引き締めていなくては」
(参加者感想から)

生徒指導係・主事・ 委員合同研修会開催

6月17日(月)市ふれあい福祉センターで、長野上水内小高の生徒指導に関わる先生方を対象に、校長会と育成センターが共催で研修会を行いました。少年相談専門委員の事例発表、小中部会と熱心に100人余の先生が参加されました。



「迅速で、的確な初期対応が、何よりも大事になる」(事例発表から)

「迅速で、的確な初期対応が、何よりも大事になる」(事例発表から)

☆困ったら困る前に☆

少年育成センター相談ダイヤルへ

電話 228-85888

月～金曜日 8時30分～17時15分

※匿名でけっこうです
来所の相談にも応じています

教材DVDをお貸しします

- ①親や先生が知らない子供防犯スクール 連れ去り・誘拐編 (24分)
 - ②中学生の命と心を守る 防ごう!性のトラブル (20分)
 - ③いじめの早期発見と対策シリーズ 保護者編 (26分)
 - ④スマホの安全な使い方教室 SNSのトラブルに (23分)
 - ⑤親や先生が知らない子供防犯スクール ネット・SNS・トラブル編 (25分)
- 申込みは少年育成センターまで
電話 228-8547

編集後記

「不登校の子が学校に行けるようになることは本当によいことなんですか?」一学生が教授にした質問だそうです。あなたならどうお答えになりますか。時にこの学生のような視点を持って子どもと向き合うことは、心に寄り添い支援する大人にとって大事な一面ではないかと思えました。実り多い令和元年度の下半期になりますよう祈念申し上げます。